

---

# それ

廻社

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それ

### 【著者名】

Z6667C

### 【作者名】

風汎

### 【あらすじ】

「カウンターに来て下さい」それは助けを求めるひととは限らない。

## 第1話・カウンターに来て下さー（前書き）

注意・そんなに対したこと無いですが、一応流血します。

## 第1話・カウンターに来て下さい

「いらっしゃいませ」

「ありがとうございます」注：繰り返し  
毎日愛想笑い振りまいて、喉が枯れるまで声出して、俺何やつて  
んだろう？

全国色々な場所で見かける某コンビニ。

その中の一つ、俺は安い時給で必死に働いていた。

夕方6時から、夜11時までの5時間。がんもどきのように膨れ  
たオーナーか、能面でのっぺりとした顔立ちの女性アルバイト北川  
さん。

そのどちらかと一緒に仕事をする。

オーナーと仕事をするよりは、北川さんと仕事をする方が楽しか  
った。

今日は北川さんとで、一人で話をしたりしながら仕事をしていた。

「あのお客さん絶対カツラだよ。何か浮いてるもん」

「ありや駄目ですね。タケコブター付けたら、カツラだけ先行つ  
やいますね」

そんな下らない話をしていると、じみを片付ける時間になつたの  
で、取り掛かることにした。

いつものように北川さんにレジを頼み、裏にあるじみから順に片  
付ける作業にはいった。

店内の客が少なくなつたときを狙つて、裏のじみを取りに行つた。  
裏には監視カメラの映像がモニター画面に映し出されていた。

4分割された画面は、レジ上の2台と、レジとは反対側の隅に1  
台ずつ、計4台あり、音声も録音していた。

机の上にはその他に、パソコンが置いてあり、オーナーはパソ  
コンで仕事をする方が多かつた。

「カウンターに来て下さい」

女性のデジタルな声が耳に響いた。

モニターの監視カメラの映像を見ると、北川さんが監視カメラに向かつて手を振っていた。

レジに付いているタッチパネル式の画面には、商品が映し出される他にはたくさんの機能が付いている。

その中の

「呼び出し」ボタンを押すと、裏にいる店員に今のよつた声が届けられる。

「レジが混雑したり、分からぬことがあるたら、このボタンを押して読んでくれていいから」入った頃そう言われたのを覚えている。燃える「ごみ、燃えない」ごみの一ひとつを「ごみ箱から袋」と取り外し、新しい袋に付け替えた。

「カウンターに来て下さい」

モニターに田をやると密はおらず、北川さんも普通に立っていた。分からぬことでもあるのかな? そう思い「ごみの袋を両手に持ち立ち上がると、また声が聞こえた。

「カウンターに来て下さい」

どうしたんだろう? モニターを見ると北川さんは外を見つめながら呼び出しボタンを押していた。

そのうちボタンを押す指はだんだん早くなり、声も狂つたように叫び出した。

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

「カウンターに来て下さい」

ピンポンと客が店に入った音と共に北川さんが動き出した。レジから少しすつ後退りはじめ、何かに怯えているように見えた。

後ろに後ろにと下がっていく北川さんは監視カメラに写らなくなつた。

そして…。

「きやああああああ！」

モニターからと実際に聞こえる声が一重になり俺の鼓膜に響いた。何が起こったのか考えたくなかつた。

胸が苦しくなり呼吸が早くなるのが分かつた。

うまく唾も飲み込めなくて、口の端からだらだらと零していた。寒くないのに体が震える。怖くて堪らない。穴という穴から水分。汗、涙、鼻水、涎が一斉に。拭うに拭えない。

「カウンターに来て下さい」

誰かが押している。

俺がいることを知つていて。怖くてモニターは見れなかつた。

「カウンターに来て下さい」

また呼び出された。

恐る恐るモニターに田をやると、レジ周りが血で赤く染まつているのが分かる。

ギイツと裏のドアが開いた。突然の出来事に俺は近くの「テック」キブラシを手に取つた。

## 第2話・思考と視界と死

少し開いたドアは、押せば開く軽いドアで、風が強い日や、誰かが通つただけでも揺れるようなドアだった。

「中野くん

俺の名前に聞き覚えのある声。

「北川さん？」

持つていたデッキブラシでドアを押すと、そこには北川さんが血だらけで立つていた。

「だ、大丈夫ですか？」

デッキブラシを置いて駆け寄つたのが失敗だった。

よく見ると北川さんの右手には血で染まつたナイフが見え、左手には女人人が襟元を掴まれ、血だらけでぐつたりとしていた。

俺が全てを理解したと確信したのだろう。

持つていたナイフが俺の顔面を切り裂いた。

頭から左目に真っ直ぐ振り下ろされたナイフは、俺に致死量の血を確実にさせた。

「うぐがあああああ

言葉にならない痛み。

両手で押さえるけれど、血は止まらない。視力を失なつた目から温かい血と涙が溢れる。

よたついた揚げ句、自分から溢れ出た血で滑つてしりもちを付いてしまつた。

北川さんは半笑いで俺に歩み寄ると、ナイフを持ち替えた。

それはめつた刺しをイメージさせる持ちかたで、北川さんは腕を持ち上げた。

「止めて!!」

俺の声も空しく、抵抗を試みた右手ごと心臓にナイフは突き立て

られた。

「げべうええんうう」

やはり言葉に出来ない。

この痛みは永遠に感じることは出来ないだろう。

俺はそのまま動けなくなつた。

頭ごどごとりと落ちた俺は、その後の北川さんを見続けた。血だらけになつた上着を脱ぎ、いつからしていたのかゴム手袋を取り外し、履いていたスニーカーの底を外し、持つて来たのと付け替えた。

そして新しい上着に着替え、窓を開けると、ペットボトルの注ぎ口側を切り取つた不思議な形の物を二つ取り出し、上着、ゴム手袋、靴の底、ナイフを二つに平等に詰めるとガムテープで封をした。窓の外は川になつっていた。北川さんは楽しそうに鼻歌を口ずさみながら作業を続けた。

おもろにハンカチを広げ、顔に手をやると、顔にひびが入つた。ぼろぼろと零れる能面は、顔にかかつた血を吸い取り汚い色になつていた。

あ、意識が無くなる。

自分でも分かる。全てが動かなくなつてゐる体。

俺死ぬんだな。

ハンカチの上に能面を落としていく北川さん。

昔に殺された名も分からないお客さん。

今の息絶えようとしている俺。

最後に北川さんの素顔を見ようと田を凝らしながら俺は息絶えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6667c/>

---

それ

2010年10月8日15時55分発行